

M09a SoHO/EIT によるダークフィラメントおよび周辺の構造と変化

吉楽高夫、内田豊、羽賀良太郎、宮脇崇（東京理科大、名大STE研）

我々は SoHO/EIT により、1998 年 5 月 17 日に太陽面上南緯 45 度のあたりで東リムから現れて、6 月 1 日に西リム上で不安定化し、SoHO/LASCO でその CME 化が観測された極域ダークフィラメント、およびその周辺領域のコロナ構造の構造と変化を調べた。このフィラメントは東リムでは軸が殆ど視線に一致するようなオリエンテーションで出現した。両側に小さいループから成るアーケード様の構造があり、太陽回転と共にこれを含むダークフィラメントを囲む領域のコロナ構造をいろいろな方向から見ることが出来、その 3 次元構造を調べる事が出来た。このダークフィラメントは一回転前には倍くらい長い DF であったが裏面での活動により DF の西半分は消失していたがこの両側のアレイはその後も残っていた。これらについての光球面磁場の MDI データ、Ha データ、「ようこう」データ等を総合的に調べ、DF 周辺コロナの構造とその行動について調べた。また、6 月 1 日頃の DF の不安定化についてもその詳細が見えている貴重なイベントであり、Ha、EIT、Yohkoh、LASCO による総合的観測で DF エラプションで起こった事を調べる事が出来た。これによると、DF は最初に不安定化して上昇した後、一時上昇を停止し、それから本格的に飛び去る。この時、磁場のアクションを示唆する捻れループの形で飛んで行く。発表ではこれらの詳細について報告する。